



明石市立
文化博物館

文化博物館だより 第184号

2007年8月26日

みなさん、こんにちは。夏休みも残りわずかになってきました。

● 対談「渡辺うめを語る」

8月19日(日)、渡辺うめさんの長女の石野真菜さんと、渡辺うめ友の会事務局の吉田ふみ彙さんによる対談「渡辺うめを語る」が開催されました。石野さんからは「母としての渡辺うめ」像、吉田さんからは「作家としての渡辺うめ」像が語られました。

左から石野真菜さん、
吉田ふみ彙さん



うめさんが娘さんのために作ったかばんが披露されました

このたび、石野さんはお母さん手作りの小学生時代の通学かばんを持ってきてくださいました。藁を編んで作ったものにアップリケが施され、裏には赤い糸で「わたなべ」と刺繍されています。60年も経っているとは思えないような丈夫で美しいものです。足袋も草履もセーターもお母さんの手作りだったそうです。そんな器用で働き者のお母さんですが、ひとたび人形を作り始めると、洗濯物は放置され、お鍋は焦げつかせ、流しに食器の山ができてしまうほど、制作に没頭するそうです。吉田さんはその状態を「鬼が棲みついている」と表現していました。

うめさんは人形をただ「かわいい」と見てほしいわけではないそうです。ある地域ではかつて「いずめこ」という藁で編んだかごに子どもを入れて育てていました。今では中に人形を入れた「いずめこ人形」がお土産物として売られていますが、そこにはいずめこに子どもを入れなければならない時代背景、つらさや貧しさが語られていない、とうめさんは言います。子守をして、学校に満足に通えなかった子ども時代、お金がなくて病院にいけない農家の現状を見た看護師時代を経験したうめさんの人形作りの原点がそこにありました。



手仕事を体験した世代は少なくなり、布はぼろぼろになる。うめさんは「人形の命にも限りがある」と仰るそうです。対談を聞いて、限りあるわずかな時間に人形に出会えた奇跡を嬉しく思いました。是非、皆さんもうめさんの人形を直接ご覧になってください。